

### エルサレム入城の意味

(マタイ21・1〜11)

#### 一、主イエスの御意思だった

1節をご覧ください。〈それから、彼らはエルサレムに近づき、オリブ山のふもとのベテパゲまで来た。〉と書かれています。時は、イエスが十字架にかけられた週の初めの日のことです。場所はオリブ山のふもとのベテパゲです。イエスは、二人の弟子に言われました。1節後半より2節です。〈そのとき、イエスは、弟子をふたり使いに出して、言われた。「向こうの村へ行きなさい。そうするとすぐに、ろばがつかれていて、いっしょにろばの子がいるのに気がつくでしょう。それをほどこいて、わたしのところに連れて来なさい。〉と。この箇所から分かるのは、今からなそうとしていることは、主イエス御自身の意思であったことです。では、「今からなそうとしていること」とは、何なのでしょう。それは、ろばに乗ってエルサレムに入られることでした。さらに、エルサレムに入るとは何を意味していたのでしょうか。それは、御自身に授けられた使命を成し遂げられることでした。すなわち、苦しみを受けて、殺されるためであったと知ります。

弟子たちは主イエスがおっしゃったとおりにしました。6節です。〈そこで、

弟子たちは行って、イエスが命じられたとおりにした。〉そして、イエスはろばに乗られました。7節です。〈そして、ろばと、ろばの子とを連れて来て、自分たちの上着をその上に掛けた。イエスはそれに乗られた。〉とあります。

ろばに乗ってエルサレムに入られたとは、何を意味していたのでしょうか。それは、王としてです。聖書の舞台となった地域でろばは、高貴な人が乗る動物であったことが分かっています。もちろん、荷物の運搬のためにもろばは使われましたが、ここで主イエスは、王としてエルサレムにお入りになりました。すると、群衆は喜びました。歓迎しました。8節、9節です。〈すると、群衆のうち大ぜいの者が、自分たちの上着を道に敷き、また、ほかの人々は、木の枝を切つて来て、道に敷いた。そして、群衆は、イエスの前を行く者も、あとに従う者も、こう言つて叫んでいた。「ダビデの子にホサナ。祝福あれ。主の御名によつて来られる方に。ホサナ。いと高き所に。〉と。〈ダビデの子〉とは、当時のユダヤ人にとって「救い主」の称号でした。ですが、それはかけ声であつて、群衆は意味が分からずに叫んでいました。私たちが見失つてならないのは、主イエスが何をなさろうとしたかです。エルサレムに入られたのは主イエス御自身の意思でした。しかも、柔和な王として入られました。そのことを、聖書記

者は解説しています。4節、5節です。〈これは、預言者を通して言われた事が成就するために起こつたのである。「シオン」の娘に伝えなさい。『見よ。あなたに王があなたのところに来られる。柔和で、ろばの背に乗つて、それも、荷物を運ぶろばの子に乗つて。』と、旧約の預言者ゼカリヤの言葉を引用しています。引用したと言いましても、あえてある言葉を落としました。それは〈義なる者で、勝利を得(新改訳二〇一七)〉です。マタイが、主イエスの柔和さを強調したかったことが分かります。

#### 二、キリストと私たち

主イエスはどのようなお方だったのでしょいか。そして、たいせつなのは、主イエスが自分にとって何者であるかです。前者は聖書によって語られています。しかし後者は私たち一人ひとりが決めることです。聖書が指し示す神は、決して強要なさらないお方です。私たちが自分の意思で創造主をあがめ、神を愛し、神にお従ひして行きたいと願うときに、神は、すなわち父・子・聖霊として御自身をあらわされた神は喜びになります。

さて、主イエスがろばに乗ってエルサレムに入られた時、群衆はどのような受け止めたでしょうか。今一度、8節、9節をご覧ください。群衆は、イエスの姿を見て、誉めそやしました。ですが、

群衆の反応は、少しも気に留める必要はありません。無意味です。この時誉めそやした群衆が、数日後には「十字架につける」と騒ぎ立てているからです。私たちが見上げるべきお方は、イエス・キリストです。教会は、イエス・キリストを創造主なる神が遣わされた救い主であり、人となられた神と見えています。きよう開かれていた聖書箇所は、主イエスについて次のように証言しています。

第一は、ご自分からエルサレムに行き、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺される道に向かつて歩まれたこと。

第二は、王であることを、御自身からあらわされたこと。

第三は、柔和な方であること。

第四は、聖書全体からのメッセージになりますが、創造主なる神はイエス・キリストにおいて御自身をあらわしておられることです。

要は、聖書が指し示すイエス・キリストを前にして、私たちは、あなたは、私は、主イエスを何者と見るかです。神はイエス・キリストにおいて御自身をあらわされ、私たちに決断を迫っておられます。決断をするのは自分自身です。

受難週を迎えました。今一度、人となられた神、救い主であるイエス・キリストに思いを馳せようではありませんか。